

印象派の画家ピサロの絵

藤原 道夫

印象派の画家の中で、モネ、ルノワール、ドガといった名はよく引き合いに出されるので知っている人は多いだろう。一方、カミーユ・ピサロはよく知られていないのでは？ 私はこの画家の絵が大好きだ。その証となる三つのエピソード。

随分昔のこと、初めて国立西洋美術館を訪れた時、ピサロの絵「立ち話」に出逢い、しばし立ち止まって眺め入った。道側の農婦と思われる女性が薄い板の杭が連なる塀にもたれて立ち、内側の女性に話しかけている。塀全体が内側に傾く。周りは木々が茂り、濃い緑に包まれている。ひそひそ話しをしているようで、静寂な雰囲気漂う。小鳥のさえずりは響いていそう。質素ながら平穏な田舎の生活がにじみ出ているようなこの絵が好きになった。

1980年代の半ば、東京のデパートで「ピサロ展」が開催された。珍しいことだ、この機会を逃すまいと新潟から見に出かけた。一通り楽しんで出口へ、順路は自然と展示品に関連する物品の売り場へと続く。ふと、模写したような絵「井戸端の女と子供」（シカゴ美術館蔵）が目にとまる。コピーながらもなかなかよく出来ている。しばし考えて求めた。

当時は地方都市でも額縁屋が繁盛していた。早速絵を持って行き、部屋に飾りたいと相談する。店員は予想より立派な金色がかかった額縁を探し出してきて「このくらいの額に飾ると絵が映えますよ」と言う。ためらったが、結局すすめられた額に収めて貰った。絵より高がついたかもしれない。その絵は今も部屋に飾ってある。井戸端のレンガの枠にリラックスしてもたれている若い女と向き合う子供が中心となっている風景を眺めていると、ほのぼのとした気分が漂ってくる。

暑かった夏が過ぎ行く頃、国立西洋美術館に出かけた。所蔵品が以前より増えているよう。一通り見たが、目当ての「立ち話」がない。館員に尋ねると、時々展示替えをしているとか。ピサロの作品として「収穫」が展示されていた。初めて見る絵だ。農婦が麦の収穫に勤しんでいる風景が全体にベールが掛かっているような柔らかな暖色で描かれている。麦も豊かに実った様子で、働く農民の健全で平和な生活が伝わってくる。この絵を見ることができたのは思いがけない収穫だった。

同じような場面を描いているミレーの絵を思い出して比較してみる。そこには人の尊厳、

宗教心といった精神性を表現しようとする意図が感じられる。一方ピサロの絵には、穏やかで健全に生活する庶民の姿がさがさりげなく描き込まれているように感じる。

このような優しい眼差しで庶民ないし農民の姿を描くカミーユ・ピサロとはどんな人物か、興味が湧いてきた。

カミーユはカリブ海の島（デンマーク領）でユダヤ系両親の許 1830 年に生まれた。25 歳の時パリに出て画家を目指して修行する。後にパリ郊外のポントワーズに住み、辺りに住む農婦を描いて名を成した。8 回開かれた印象派展全てに出品した唯一の画家である。ただ画風が独創性に欠けるといわれ、作品の評価は高くはなかったようだ。個性豊かな印象の画家たちの長老格として仲間をまとめる活動をする一方で、セザンヌ、ゴッホ、ゴーガンら若手の才能の理解者で、彼らが世に出る後援役も果した。1903 年没。

彼の絵から感じ取られる平和な世界に生きる平凡で健康な庶民に注がれる優しい眼差しは、人格のしからしめる所だ。この眼差しが、個性的な超一流画家の作品とは違った面で、人の心を捉える穏やかで詩情あふれる絵を生み出す源となっているように思う。